

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき敷に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第80号

平成30年12月11日

発行=四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

現地学習 池田氏菩提寺・大廣寺と池田城址公園

## 正行、遺腹の子、池田教正ゆかりの地を訪ねて

### 池田城はいつ、どこにできたのか？

#### 備前池田氏は正行の末裔

12月の例会は、現地学習で、楠正行遺腹の子、池田教正ゆかりの地池田市を訪れた。

この件について、塩増山大広寺略記に記されているので、以下転載する。

一 池田城は大広寺山下の細い杉ヶ谷川の谷を隔てた丘陵の上に、建武の昔、池田教依が築き北朝の足利氏に属していた。二代目の城主は南朝の楠正行遺腹の子、池田教正である。

これは正行が河内四條畷で討ち死に後、その妻の父、能勢の野間城主、内藤伊賀の守満幸が足利方に変節したので、正行の妻は当時懐妊していたが離縁され、教依に再婚して子が無く、教依は正行の子、教正を養うて池田城を継がしめた。

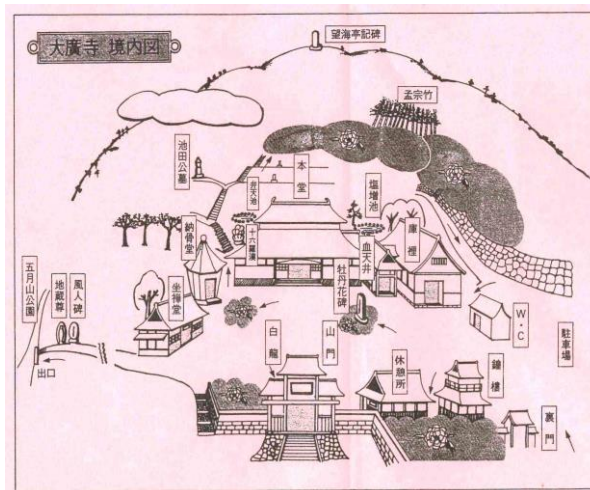
しかし、教正は後年その子、佐正に城を譲り、遠く安芸の五日市へ去って彼の地で城を築き、南朝方に属したのである。

なお、池田筑後の守充正（第5代城主）の弟、池田恒元の子、恒利が池田城を出て、その子孫代々備前岡山の藩主となった。即ち備前の池田氏は池田城主池田氏の分家にあたる。

#### 忠義と武勇の跡、血天井

この史実によれば、正行の子孫は後世に営々と続き、備前岡山の池田藩は正行の末裔という事になる。

楠正行の史料はほとんどなく、ゆかりの施設も、また数少ない。私たちは、四條畷ゆかりの楠正行を学び、顕彰することを目的に活動しているので、正行本人ではないもの



の、正行の遺児が生まれ、育った地に足を踏み入れただけでも、肌を感じ、ワクワク感が漂う。

大広寺に残る歴史的遺産の中で、正行ゆかりの地ならではの遺物が残る。それは「血天井」である。

大広寺発行「当山境内と故事」に、以下記されている。

#### 一 血天井

永正5年(1508)、管領細川澄元を細川高国が攻めた時、近畿の多くの城はすべて高国に

降伏したが、池田城主池田筑後の守貞正はただ一人、澄元のため高国の大軍を恐れず戦い、ついに力尽きて城に火を放ち、腹を切って自害した。

当時の人々は池田城主の忠義と武勇を称え、その美談を後世に伝えるため、血の付いた板を天井に使用し供養したのである。

この血天井は、大広寺境内中央にある本堂の玄関の天井に今も残っている。下からこの天井を見上げると、血らしき跡が、何枚かの板に飛び散った様子を思わせる跡が見える。

自刃したときの地が天井にまで、このように広く飛びちるものと疑問を持ったが、元々廊下の板を天井板に使ったものと分かり、一同、納得した。

楠氏は吉野朝一筋、正統な天皇を支え続けた一族で、利害得失では決して動かなかったが、池田貞正もまた同じく忠義と武勇の人であったことを示す痕跡が、今も残ることに感慨ひとしおである。

今一つ、全員が釘付けになった場所がある。

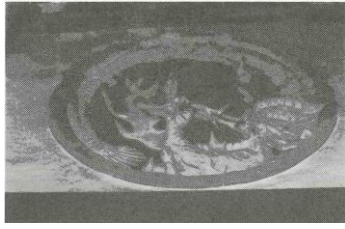
それは、山門の内側の上に掲げられている、直径120セ

ンチメートルほどの円形の額で、とぐろを巻いて白く小さい龍が描かれている「白龍」である。

同じく「当山境内と故事」に、以下記されている。

### 一 白龍（山門裏側上の白い額）

この白龍が本堂西側の弁天池の水を每晚飲みに行くので、時の住職が眼の玉を白く塗りつぶすと、龍は水を飲みに行かなくなったという。



またこの弁天池はどんな旱魃にも涸れることはない。直下の六角石に龍の爪の痕というのが今も残っている。

この白い龍は、今にも天に向かって飛び立とうとする姿が立体的に浮き彫りにされているもので、恐らく漆喰で塗り上げられたものと思われるが、めったに見られない逸品である。

また、山門直下に六角の石があり、無造作にえぐられたような跡があり、これはいったいどういう意味があるのかと疑問に思ったが、この説明書きを読み、「ああ、そうなんだ。でも、本当に・・・。」と、納得半分、不思議半分だった。

### 山裾、まちなかに接する池田城の謎

大広寺を後に、池田城址公園に向かったが、入り口に、「火曜日休園」の案内とともに、門は閉じられている。せっかく来たのに残念と、引き返そうとした所、公園管理の池田市の職員の方が来園され、訪問の主旨をお話したところ「四條畷市からせっかくお見えでしたら、どうぞ、ご覧下さい。」と、中に入れていただくことになった。全員、ラッキー！と大喜び。



この池田城址公園は、櫓を中心に、日本庭園、枯山水、空堀散策路、花菖蒲園、茶室、管理棟等が整備された素晴らしい公園で、遠く池田の町も遠望でき、眺めも素晴らしいものである。

「扇谷さん。この城は何時つくられたのでしょうかね。」と、楠野さんに尋ねられ、「四條畷の合戦の後すぐの時代のことですから、1300年代には建っていたのではないのでしょうか。」と答えた。

池田城址公園のリーフレットが触れているので紹介する。

- ・池田城の名が登場する最古の史料は、建武3年(1336)「平国茂軍忠状」で、南北朝時代に池田城が存在していたのではないか、と言われている。
- ・この場合、果たして、現在、城山町の台地上にある池田城跡を指しているのか、以下の点で疑問がある。
- ・南北朝時代の城は、山深い、しかも山頂や尾根伝いに築かれるものが多く、街道や集落に接し、簡単にその存在が認識できる場所に築かれる例はほとんど見られない。
- ・平国茂軍忠状に載る、軍勢が夜詰をしたというのであれば、ある程度の面積と防御機能が必要となるが、池田城の城域が拡大され、防御機能が高められたのは発掘調査によ

って1500年代になってからと推定されていること。

・結果、建武3年の軍忠状に載る池田城は、この池田城跡ではなく、五月山山頂のどこかに城が築かれていたのではないか。

・池田氏は、勝尾寺(箕面市)蔵「勝尾寺文書」によれば1200年代前半に檀家衆士豪30数人の一人として現れ、勝尾寺文書の永享8年(1436)「歳末巻数賦日記」では10人程度に固定化され、池田氏も国人として成長しその一人に残っていることから、1400年代の前半には、現在の池田城跡の場所に館を築いたのではないかと推定される。

### 狭間から見て鉄砲伝来前の築城

楠野さんは、「扇谷さん。この城は、この狭間(さま：防御用の穴や窓。銃眼、



砲門とも。)の形から見て、間違いなく鉄砲伝来前の城ですよ。」と指摘。リーフレットに載っている結論と一致した。すごい！

狭間の形も、弓の時代から鉄砲の時代、大砲の時代に代わり、大きさも形も変化をしたとのこと。

しかし、南北朝時代の城址を見てきた者にとって、この池田城の位置はどうしても疑問が残る。

大広寺の裏には五月山があるにもかかわらず、その菩提寺である大広寺よりも下の、それも平地に近いまちなかに接する場所に城が建っていることの疑問である。

リーフレットにも触れているが、後方からは丸見えの城であり、籠って戦う城とは到底思えない。

楠氏については史料も少なく、分からないことが多いが、この池田城についても同様のようだ。

櫓の前で記念撮影をし、職員の方に声をかけて池田城址公園を後にした。

この後、食事をとり、阪急電鉄グループの創始者、小林一三記念館を訪れ、帰途に就いた。

(写真：構内図と白龍は「大広寺」リーフレットと小冊子(逸話編)、復元図は池田城跡公園リーフレットから転載/1p写真：田中桐江撰「牡丹花隠君遺愛碑」、2p写真 池田城址櫓、集合写真は国府撮影)

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)